

平成25年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 芳賀 忠夫

今年は、喜多方市全小学校十七校が農業科を実施して三年目を迎えました。農業科の運営にあたり、地域の皆様、JAを始めとした関係機関の皆様、耶麻農業高等学校の皆様、各校の先生方など、多くの皆様のご支援とご協力に対して心から御礼と感謝を申し上げます。

さて、昨年度第四十二回日本農業賞の特別部門「第九回食の架け橋賞」において大賞を受賞したことにより、喜多方市小学校農業科への関心が非常に高まり、全国各地より視察やテレビ・新聞雑誌の取材を多く受けるようになりました。その中で、「なすこと」によって学ぶ精神に基づき、喜多方市の基幹産業である農業を生かし、農業そのものを学習するのではなく、「農業」で豊かな心の育成・社会性の育成・主体性の育成を目指していることをお話しております。そのことが、この作品集を読んでもいただくことにより十分くみ取っていただけると自負しております。

また、今年度より小学校農業科をさらに効果的に学習するため、各学校の栽培品目を一学年につき「必須作物」

＋「選択作物」で三品目以内としました。これは、ひとつの作物にできるだけ手をかけじっくり育て栽培する環境が必要であると考えたためです。各小学校の先生方や農業科支援員の交流会ではその効果について、食するまでの取組を含め確実な成果として捉えることができました。

農業科から生まれた子どもたちの作品は、「農業のすばらしさ」「いのちの大切さ」「周りへの感謝の気持ち」「人との関わり」など様々な視点から書かれており、子どもたちの農業に対する感じ方や見方には驚かされるばかりです。体験しなければ決して表現できない思いがたくさん詰まっていることがわかります。また、ゴールを見据えてじっくりひとつひとつの作物を育てた子どもたちの様子もこの作文から十分伺えるのではないのでしょうか。ぜひ、多くの皆様にご一読いただければ幸いです。

最後に、大変お忙しい中、ご寄稿いただきましたJT生命誌研究館館長の中村桂子先生、審査をしてくださった審査員の皆様、冊子の作成にご協力いただきました宮城学院女子大学の佐藤幸也先生、北海道教育大学の佐々木貴子先生と学生の皆様に心より感謝申し上げます。今後も喜多方市の小学校農業科が、本当の生きる力を持つ子どもたちを育てる一助となるよう取り組んで参りたいと思います。

寄稿

農業科はすばらしい、喜多方の小学生はすばらしい

JT生命誌研究館 館長 中村 桂子



すごい！すばらしい！送られてきた作文を読み思わずこう言っていました。内容だけでなく文章がとてもよくできています。農業科は自分で体験し、自分で考えるので、心の中から自然に言葉が生まれてくるのでしょうか。

喜多方市の小学校農業科が始まってから七年、作文コンクールも五回目になったのですね。早いものです。皆さんも知っていますね。平成二十五年の三月にこの活動で喜多方市教育委員会が第四十二回日本農業賞特別部門・第九回「食の架け橋賞」を受賞しました。日本農業賞は、日本中の農業の専門家の中からすばらしい仕事をしている人、その地域に役立っている人が選ばれる大きな賞です。その賞を教育委員会が受賞するなんて恐らく今までなかったことでしょう。もちろん小学校農業科を考えそれを支えてきたのは教

育委員会の方たちですが、実際に行動したあなたたちがいなければ受賞はなかったでしょうから、これはみんなの賞でもあります。作文を読んでいると、「最初はいやだった」と書いている人が何人もいました。「田植えの時のあの足にくる違和感」とか「大豆の草むしりは一番いやな時間」と実感のこもった文もありました。でも興味深いことに、みんな最後は農業の大変さと同時に楽しさを知り、作ったものをおいしく食べた喜びを書いていきます。こうしてあなたたちが農業に思いきりぶつかって行き、大きく成長したことがすばらしいとされたのです。おめでとうございます。これはあなたたちの大切な宝物です。忘れないで下さい。

私はこれまで発表会に参加することはありましたが、実際の活動に参加したのは今年度が初めてです。熱塩小学校でトウモロコシの収穫に加わりました（楽しいところだけでゴメンナサイ）。もぎたてのトウモロコシの皮を剥いで出てきた粒の輝きと、それを口にした時の甘い汁の味は忘れられません。タネ蒔きからずっと面倒を見てきた熱塩小のみんなは私の十倍、いや百倍幸せだったでしょう。作文に「農家の人たちは食べる人たちの『おいしい』という笑顔 pensando 思っ て作業をしていることがわかった」という文がありました。お母さんやおばあちゃんの笑顔がそれを教えてくれたとありました。そこから農家の人の気持までわかったのですからすごいです。こういう気持になった人はたくさんいると思います。人が喜ぶ姿を思っ て楽しくなるという気持は、人間として最も大

切なものです。大人だってなかなかこれを知るのはむずかしい。農業科はそれを教えてくれたのです。あなたたちは幸せです。

最後にどうしてもとりあげたいのが、熊倉小の工藤くんです。「ぼくにはゆめがあります。それは農業家になることです。祖父や祖母が農家でぼくにとってあこがれの人だからです」というところから始まり、最後に「学校は、ゆめをくれました。農業家になりたいというぼくのゆめをもっともっと強いものにしてくれました。野菜を作る楽しさや友達と協力する楽しさを教えてくれました」とあるのです。「ゆめへの一歩は学校から」という題です。日本中の学校にこの文を送りたいです。工藤くんのゆめの実現、楽しみにしています。そして君がしえん員になってくれた時、喜多方市の小学校農業科は本当の教育ができたと思えることができます。この他にも、家が農業という人たちが、これまでは手伝わなかったけれど農業の大変さと喜びを知ったので手伝いをしたい、大人になってからの農業にこの学習を生かしたい、自分も次の時代にこのすばらしい米作りのバトンを渡したいという心強い言葉を書いています。

喜多方市小学校農業科バンザイです。

入
賞
作
品

目次

【大賞】

大豆の草むしり

第二小学校 五年

堺 愛純

12

命に感謝して

山都小学校 六年

大塚 菜生

15

米づくりから学んだこと

豊川小学校 六年

穴澤 千叶

13

農業の大切さ

高郷小学校 六年

高橋 愛那

16

かけがえのないもの

加納小学校 六年

長井 穂乃実

14

【優秀賞】

ゆめへの一步は学校から

熊倉小学校 四年 工藤 葵 17

食べ物の大切さ

第三小学校 六年 若菜 堅伍 21

作物の大切さ

熱塩小学校 四年 小林 美結 17

農業科を学んで

関柴小学校 六年 高埜 颯 22

ニンジンのしゅうかくと種について考えたこと

堂島小学校 四年 福地 花奈子 18

これまでの農業科について

姥堂小学校 六年 手代木 聡太 22

食べ物の命をいただくということ

豊川小学校 五年 折笠 果奈 19

感謝の気持ちを伝える大切さ

駒形小学校 六年 猪俣 美月 23

農家の人たちがいつも思っていること

熱塩小学校 五年 福王寺 郁哉 20

サトイモが教えてくれたこと

山都小学校 六年 平井 理子 24

【農業科賞】

虫との命のわかちあい	第一小学校	三年	山本 実穂	25
さつまいもを育てて食べたよ	第三小学校	三年	小檜山 将人	26
さつまいもをしゅうかくしてうれしかったこと	第三小学校	三年	佐藤 晴都	27
きなこ作り	関柴小学校	三年	宇津木 史織	28
がんばった野さい作り	豊川小学校	三年	小森 奏	29
すごいなあ農ぎょう科	豊川小学校	三年	佐原 凜香	30
とてもたいへんな農業	加納小学校	三年	遠藤 紀香	30
さつまいものひみつ	塩川小学校	三年	山内 萌花	31
たくましいピーマン	高郷小学校	三年	高野 莉空	32
自然の力で育ったくりかぼちや	第一小学校	四年	小澤 歩波	33
農業と気候の関わり	第一小学校	四年	樋口 美穂	34
野菜の力	第二小学校	四年	折笠 明里	35
おいしかった冬至カボチャ	松山小学校	四年	山本 真弘	35
楽しかった最後の野菜作り	豊川小学校	四年	遠藤 星矢	36
ジャガイモ作り	塩川小学校	四年	佐野 茜奈	37
田植え体験を通して	第一小学校	五年	鈴木 桃雛	38
稲を育ててみて	第二小学校	五年	宇内 愛結	39
米と命	関柴小学校	五年	上野 永遠	40

米作りを経験して

慶徳小学校 五年 武藤 峻士 40

農業とわたし

熱塩小学校 五年 上野 華夏 41

米作りをして初めて感じた苦労とお米のありがたみ

加納小学校 五年 渡部 光 42

初めての農業活動

堂島小学校 五年 桑原 未有 43

命を頂く事への感謝「いただきます」

駒形小学校 五年 五十嵐 陽規 44

農業のありがたみ

山都小学校 五年 穴沢 凜子 45

野菜のおいしさと命の尊さを伝える

第二小学校 六年 外島 美瑠 46

六年間の農業科体験で学んだこと

上三宮小学校 六年 田中 桃葉 46

失敗から思ったこと

上三宮小学校 六年 高橋 由羽 47

米作りのバトン

豊川小学校 六年 小椋 悠斗 48

米作りの思い出

慶徳小学校 六年 齋藤 優斗 49

農業学習で学んだ命の大切さ

熱塩小学校 六年 遠藤 伶菜 50

農業科の学習を通して

駒形小学校 六年 大川原 真叶 51

喜多方市小学校農業科作文コンクールに寄せて

北海道教育大学教育学部札幌校 総合学習開発専攻

生活・食育グループ 三年目 荻野目 哲

編集後記

54

52

【大賞】

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

大豆の草むしり

第二小学校 五年 堺 愛純

私の中で、一番いやな時間がやってきました。大豆の草むしりです。

「こんな暑い日にいゝ。」

と、ぜんぜんやる気が出ませんでした。

だって、虫もいるし、暑いし、土が手にくつつくし、いやなことばかりでした。草むしりが終わって、あせをかくなか、畑を見てみました。なぜか私のむしったところが、きたく見えました。みんながんばっていたのに、私は、弱音をはいてばかりで、ほとんどむしれていませんでした。しょんぼりしながら帰ると中また畑に行くと、校長先生が、やさしくこう言ってくれました。

「トマトどうぞ。」

がんばっていいのに：と思いがらトマトを食べてみました。これが、大豆の草むしりの思いが、変わった一しゅんでした。トマトを食べると、パアッと、いろんな思いがこめられた、おいしいあじがしました。このトマトを、育てるのに、苦労したんだあと、思いしらされました。

その時から、草むしりの時間がいやな時間ではなくなりました。食べる人进行うかべたら、すごくうれしくなつて、前大豆の草むしりより何百倍も楽しくなりました。そして、

「おいしく育つてよう！」

と心から思いながら草をぬきました。

大豆は少しずつ大きくなり、みんなでしゅうかくしました。太くて大きな豆がたくさんついていました。それを干してから、みんなで中の豆をとりました。これから、みんなどうふを作ります。

これからも、わたしは思いをこめて、自分もそしてみんなも、えがおになるようなやさいを作っていきたいと思いました。そして、やさいのおいしさや、こめられたいろいろな思いも、みんなに知ってもらいたいです。

校長先生がくれた真っ赤なトマトのあじは一生わすれません。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

米づくりから学んだこと

豊川小学校 六年 穴澤 千叶

またこの時期が来た。私は田植えが嫌いだ。あの足にくる違和感。ぬるっとしていてなかなか身動きがとれない。そして何より嫌いなカエルがいる。五月、二回目の田植えの前そう思った。実際田に入ってみると、今年は違った。確かにぬるっとしていてカエルもいる。でも、苗を植えることに夢中になった。どうやったらきれいに植えられるだろうと考えながら植えた。友達と笑い合いながら。そして、違和感もカエルも忘れていた。どろだらけの足のまま、田植え後の田んぼを見て、満足感を覚えた。去年は、早く足を洗いたかったのと思った。

私の家は農業をやっているわけではない。だから農業科で米づくりと言われても大変そうと思うだけだった。しか

しこの二年間で、私は米づくりが好きになった。その理由は二つある。一つ目は、友達と協力できることだ。豊川小は五・六年生が協力して米作りをしている。草とりも稲かりもすべて班で行う。昔の道具を使いながら、班で相談して活動するのは楽しい。活動が終わると、私も含めみんなにご苦労さんと言いたくなる。その苦労があつて、秋においしいお米が実るのだ。そのみりを収穫祭で頂く。本当においしい。お米ってこんなにおいしいのかと思った。そして、おいしいお米になってくれてありがとうと思った。米作りが好きになった理由の二つ目が、食べ物に感謝の気持ちを持つてからである。今まで、つくった人に感謝はしても、お米に感謝することはなかった。でも小さな苗が成長し、そのみりを頂くことに命を頂く重みを感じた。お米だけじゃない。野菜やお肉やお魚。他の命を頂いて生きている。粗末になんてできないと思った。食べ物も。そして他の命を頂いて生きている自分自身も。

私は、この二年間で農業が米づくりが好きになった。これから命を頂く重みを忘れずに、日々を大切に過ごしていきたいと思った。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

かけがえのないもの

加納小学校 六年 長井 穂乃実

私たちの学校では、毎年、五・六年生が一年を通してもち米づくりをしています。

私がこの一年間のプロジェクトの中でとても心に残っているのは、「一人暮らしのおじいちゃん、おばあちゃんに、私たちが育てたもち米でつくったお赤飯を届ける」という活動です。

私たちは、去年もこの活動をしました。去年は初めてだったので、あまり活動の意味を考えず、受け取ってもらった時のおじいちゃん、おばあちゃんの笑顔のすてきさ、温かさを感じただけでした。

いい事を感じることができたけど、今年は、一人暮らしのおじいちゃん、おばあちゃんの気持ち、渡す時どんな気

持ちで渡せばいいのかを自分なりに考えてみました。

自分が年をとって一人暮らしだったら、絶対さみしいし、笑い合える人がいたらと思うはずです。

そんな時に温かい思いがこもったお赤飯、笑顔が届いたら、涙が出るほどうれしくなるのではないかなと考えました。それを考えてから私は、お赤飯もつるのかざり物も、お手紙もメッセージも、「一人じゃないよ。さみしくなったらこれを見て笑顔になってね。」という思いをこめてつくったり、書いたりしました。

当日は、民生委員の方々といっしょに、五軒の家を回りました。どの家のおじいちゃん、おばあちゃんも、「ありがとう」という心温まる言葉、そしてとても輝いた優しい笑顔でお赤飯を受け取ってくれました。

この笑顔を見て、私たちは、「がんばってお米を育て、よかったね。」と笑い合っていました。

お米を育てることは、簡単なことじゃない。でもこの農業は、私たちに、いや、たくさんの人たちに「笑顔の温かさ」「大切な人への思い」を深く考えさせてくれる、かけがえのないものだなと心から思いました。

これからも、農業を大切に、大切にしていきたいです。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

命に感謝して

山都小学校 六年 大塚 菜生

「いただきます。」

いつも当たり前のように口に行っているこの言葉。そこには、農家の人の苦労や、作物の命をいただくことへの感謝の気持ちがたくさんつまっているんだと、農業科を通して私は学んだ。

私にとって、今年は小学校最後の農業科学習だった。私は、サトイモ・ジャガイモ・スイカを育てた。どれも初めてつくる野菜ばかりで、特にスイカは栽培が難しいと知り、「ちゃんと育つか。大変そうだな。」と心配になった。

そんな私の気持ちを変えたのは、全校集会で栄養士の先生が朗読してくれた、「いのちをいただく」という話だった。

「人は他の生き物の命をいただいて生きているから、その命に感謝しなくてはならない。」という校長先生の言葉を聞いてまっさきに思い浮かんだのは、「いただきます。」という言葉だった。今までは、食事を食べるという意味で、「いただきます。」と言うのだと思っていた。しかし、本当の意味は少し違っていた。「いただきます。」とは、命をいただくという意味であり、その食べ物を作った方への感謝の言葉でもあるのだ。私は時々「いただきます。」と言わないことがある。でもこれからは、自分がいただく命に感謝して言おうと決めた。そして、サトイモ・ジャガイモ・スイカも、「私達に命を分けてくれるんだから、最後までちゃんと育ててあげよう。」と思えるようになっていった。

私は、草むしりなどの手入れが嫌いだったけれど、収穫のため一生懸命頑張った。そのかいあって、どれもとてもたくさん収穫することができた。特に、立派に育ったスイカを見た時は、とても感動した。だから、スイカを食べる時は、スイカの命に感謝して

「いただきます。」

と言った。農業科を通して私は、命に感謝しなければならぬ、ということを学んだ。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

農業の大切さ

高郷小学校 六年 高橋 愛那

農業は人間が生きるためにとっても大切なことだと思う。
その理由が三つある。

一つ目は、人間が食べる食事のことだ。野菜や米、他にもいろいろな作物は、農家の方々が一生けん命作っているものだ。実際に私の祖母が野菜を作っているが、その作業はとても大変で、また、大雨や大雪、雨が降らないことなど、野菜などを作るときは自然と向き合っていかなければならないということを、この六年間で学んだ。もちろん野菜や米以外にも、魚や肉などの食品もあるが、野菜は体の調子を整えるのに大切な食品であり、野菜がなければもしかしたら栄養が不足して、みんな病気にかかりやすくなってしまうかもしれない。だから農業は人間の体にとっても

大切なのだ。

二つ目は、自然と向き合えるということだ。小学校で実際に体験したが、土にさわったり、作業はたしかに大変だけれど、汗を流しながら農業することは、とてもすがすがしかったし、心がとてもすっきりした。特に野菜や米を収穫したときは、感動して、自然が好きになった。農業をすることは私にとって自然が好きになるきっかけになった。

三つ目は、いろいろな人と交流できるということだ。農業科をやらなければ交流することがなかった支援員さんには、とてもいろいろなことを教えてもらうことができたし、祖母とも農業について話をすることができた。このように、農業がなかったら会えなかった人と接したり、農業を通して今までよりも話をすることができた人がたくさん増えた。私は農業を通して、これからもっと生きるために大切なことをさがしていきたいと思う。作物も生き物だということをお忘れずに、農家の人に感謝しながら過ごしていきたい。

【優秀賞】

ゆめへの一步は学校から

熊倉小学校 四年 工藤 葵

ぼくにはゆめがあります。それは、農業家になることです。ぼくが農業家になりたいと思うようになった理由は二つあります。一つは、祖父や祖母が農家できょうりや花などを作っているの、農業という仕事にきょうみを持ちました。また、祖父や祖母の手伝いをしているうちに農家っておもしろいなと感じ農業家になろうと決心しました。

ぼくにとって祖父と祖母はあこがれの人です。祖父と祖母は、農業のことにとってもくわしくぼくが質問すると何でも教えてくれます。今年ぼくたちは、里いもと三しゅいのパプリカとピーマンを作りました。みんなで作業しています。すごい人を見つけました。それは同じクラスのこうしろう君です。こうしろう君は、どんな作業も本気でやっていました。くわの使い方や草むしりなどいっしょうけんめいがんばっていました。ぼくは、そんなこうしろう君を見なりたいと思いました。ぼくがしょうらい農業をやる時にはこうしろう君を思いだすと思います。

農業家になりたいもう一つの理由は、ぼくの作った野菜やお米を食べてくれた人のえ顔が見たいからです。え顔で食べてくれたら、作ったぼくもうれしい気持ちになります。それにぼくはごはんが大好きです。白いごはんはどんなおかずにも合います。特にぼくの好きななつとうには、びつたりです。日本というところでは、ごはんと言うと日本だとも、思います。ぼくは、おいしいごはんを作りたいと思います。

農業は、からすなどの鳥や虫などが天てきです。自然や天候にも左右されます。ぼくは、いろいろなちえを使ってぼくの作物を守っていききたいと思います。

学校は、ゆめをくれました。農業家になりたいと言うぼくのゆめをもっともっと強い物にしてくれました。野菜を作る楽しさや友達と協力する楽しさも教えてくれました。ぼくは農業家になって学校のしえん員になりたいと思いました。

作物の大切さ

熱塩小学校 四年 小林 美結

「大根とねぎが大きく育った。」

今日は大根とねぎを収かくする日でした。

私たちは六月に大根の種をまき、ねぎの苗を植えました。まいたときには大根の種は小指のつめくらいの大きさでした。それがりっぱな大根に育っていて、私はおどろきました。

大根はとても大きくてぬけるか心配でしたが、支えん員の方にぬき方を教わり、ぬきました。大根のぬき方は力仕事だったのでなかなかぬけなかったけど、大きく育った大根の方ががんばってくれたのではないかと思います。大根の重さは二キロもありました。私たち四年生が手をかけた大根が大きく育ってくれてとてもうれしかったです。

ねぎは、苗の大きさが小さかったので育つのかなと心配でしたが、苗だった時より大きくなってとてもうれしかったです。

私たちは大根やねぎの成長の手助けをただけです。だから、私は、支えん員の方や学校の先生だけでなく、がんばって育ってくれた大根やねぎ、作物に感しやしなくてはいけません。私はとても感しやしています。

私はとても農業がきらいでしたが、風にも雨にも負けな作物の気持ちを考えてみたらきらいなんて言えません。作物が育っていく様子を見守っているうちに私は農業が好

きになりました。

家にしゅうかくした大根を持って帰り、おみそしるにして食べてみました。味は、買った大根よりとてもおいしくて無農薬はいいなと私は思いました。

これからもおいしい野菜がとれるように私は農業をがんばりたいです。

ニンジンやしゅうかくと種について考えたこと

堂島小学校 四年 福地 花奈子

わたしたちが先生からニンジンを育てると聞いたのは、四年生になってすぐでした。そのわけは、秋のいもに会るときに使うからです。失敗できないなと思いました。

種は、ものすごく小さくて、風がふくと、飛んでいってしまいました。ぱらぱらとまいたけど、とてもしんちゅうにやらなければいけませんでした。終わったら、「はあー。」ときんちゅうがぬけました。

ときどき水やりを忘れてしまったり、あまりニンジンが育たなくて一からやり直したり、いろんなことがあります。苦ろうしている間、気づかない間に、ニンジンはすく

すくと育っていました。

でも、その間にわたしは考えました。

「なんであんな小さな種から、あんな葉がしげって太いニンジンができるんだろう。」そう考えるごとに「あんな一ミリメートルくらいしか種のはばがなかったのに何千倍も大きくなるなんてどうしてだろう。種の中になにかひみつがあるのかな。」と深く考えるようになりました。わたしの予想は、種の中にいっぱいえいようがあるという考えです。

そこでわたしはインターネットで調べてみました。わたしの予想は半分当たっていました。でもそれだけではありませんでした。いろいろな自ぜんの力を受けて育つということが分かりました。風の力、土の力、わたしたちがあげていた水の力、いろいろなえいようや力で育っていたということが分かりました。身の周りにある力を受けて育っていたんだと分かり、なんだかうれしくなりました。その中にわたしたちがあげていた水の力もあったのです。

いもに会では、わたしたち四年生が育てたニンジンが使われました。きちんと育ってほっとしました。いつもは苦手なニンジンを食べてみました。あまくて、今まできらいだったのがうそのようにおいしく感じました。自分たちで

育てたニンジンは、最高でした。

食べ物の命をいただくということ

豊川小学校 五年 折笠 果奈

私は、稲作を体験して命を大切にしていこうことの大変さを知りました。

野菜は育てたことがあったけど稲作は初めてでした。只浦さんに教えてもらいながら作業しました。お米を作るには、七つの行程がありました。全て手作業で行いました。たねまきは最初の行程で「命の始まり」です。ていねいにやらないと成長しません。だから、ていねいに行いました。田起こしは「成長に必要な準備」です。土をほることで、酸素を入れ成長しやすくしました。田植えは、「成長の第一歩」です。田に稲を植えなければお米にはなりません。線と線の交わった所に三センチメートルの深さで上手に植えるのは大変でした。イオン水散布・除草は「より豊かに成長するための手助け」です。雑草を生えにくくするため、イオン水をまき、コロバシという道具で除草しきれいにしました。大変でしたが、おいしく作るためには欠かせ

ません。稲かりは、「努力の成果との出会い」です。サツと一発で切るのがむずかしかったです。稲を結ぶ時も強く結びさざがけという方法でかんそうさせます。なかなかしつかり結べず苦勞しました。脱穀は、「収穫の喜びを味わうための準備」です。足で速くふみもみをとっていきます。足がすぐつかれました。

こんなにもたくさんのお米を育て、お米は私たちのものに届きます。今はいいい機械がありますが、昔は全て手作業です。どんなに大変な作業でも食べ物は必要です。生きていくためにも。命はそれほど大切で、それを育てるのも、とても大切なことです。私はそのことをお米を作って実感しました。これからは、食べ物をいただく時、大変な思いをして育てているということを忘れず、心をこめて言います。「いただきます」と。お米の命の終わりはそれをいただく私達の「次の命のスタート」へとつながるのですから。

農家の人たちがいつも思っていること

熱塩小学校 五年 福王寺 郁哉

ぼくの通っている熱塩小学校では、農業の体験学習をし

ています。この農業の体験学習で分かったことや思ったことはいろいろありますが、まず第一に思ったことは、農家の人たちは、食べる人たちの『おいしい』という笑顔をもって作業をしている、ということですよ。

ぼくは、熱塩小学校で五年間農業の学習をしてきました。五年生で初めてやる小豆のなえうえや、五年間ずっとやっている田植えや稲刈りなど大変な作業もしました。だから、一、二年生の時は（どうして農家の人たちはこんな大変なことをやっているんだろう。）などと思っていました。

でも、その理由がようやく分かりました。収穫祭の時、ぼくたち五年生が育てた小豆のあんこもちをお母さんとおばあちゃんが食べてくれたときに、二人とも、

「このあんこもち、おいしいよ。」

と笑顔で言っていて食べていました。そのときのお母さんとおばあちゃんの笑っているすがたを見て、（ああ、農家の人たちは食べてくれる人のこういう笑っている顔が見たくて育てているんだ。）と思い、なんだか急にうれしくなりました。

ぼくは、田植えなどの農業科の体験学習をしている時には、大変だぐらいしか思っていまじましたが、本当に農業をしている農家の人たちは、（大変だけれど、食べてく

れる人たちのためにがんばろう。)とっていて、家族やぼくたちが食べて『おいしい』と言ってくれると、とてもうれしいんだと思います。それは、支援員の芳正さんや菅井さんも同じです。ぼくも、そういうことを思っていてやっている農家の人たちを見習おうと思いました。

ぼくは、農家のことをあまり知りません。だけど、食べてくれる人たちのことを思っていて、これから農業学習をがんばっていききたいです。

食べ物の大切さ

第三小学校 六年 若菜 堅伍

今までぼくは、ミニトマトや豆、ジャガイモ、さつまいも、米、カボチャ、スイカなどの作物を育ててきました。とくにスイカは、草を取ったり小動物に食べられないようにスイカの回りにネットを張ったりしました。そんな苦労があつてか、出来たスイカは、実が大きくとても甘かったです。ぼくは、スイカなどを収穫して食べた時、今までよりも深く、食べ物が食べられるという事のありがたさと幸福さを感じました。

今の時代の子供の多くは、食べ物の好き嫌が多いと言われています。残された食べ物は、捨てられています。つまりむだになっているのです。ぼくたちが口にいる食べ物は、それを一生けん命苦労しながら大切に育ててくれる人がいるから存在しているのです。もし台風などが来たら、作物がほとんどだめになってしまったりもするでしょう。でも農家の人たちは作り続けます。スーパーなどで売られている物は、そんな人たちの汗と苦労の結晶なのです。なのにそれをむだにするという事は、育ててくださった人の苦労と愛情をむだにするという事だと、ぼくは思います。昔は、食べるのがやっとの時代や食べる事すらできない時代もありました。それに比べれば今の世の中は、平和で安定していて、食べ物に困る事はめったにありません。そんな今では当り前になってしまった生活も、苦しかった昔の時代の人たちにとっては、天国と同じくらいなのではないのでしょうか。ぼくたちは、そんな世の中に生まれ、生活しているという事は、とても幸せな事なのではないのでしょうか。ぼくは、これからもっと食べ物を大切にし、けっしてむだにしたりしないようにして、作物を育ててくださった人たちと自然のめぐみに感謝して生きていきたいです。

農業科を学んで

関柴小学校 六年 高埜 颯

ぼくが、農業科活動で一番心に残った事は、田植えと稲刈りです。

ぼくにとって、二度目の田植えです。ドキドキしながら、はだしで田んぼに入った去年とはちがって、落ちついて田植えができました。小さい苗を大事に土の中に植え、縦と横をそろえながら植えることができました。でも、同じ姿勢で植えていると、体中が痛くなってしまうました。今は機械で苗を植えています。昔はこのようにして植えていたのはとてもすごいことだと、田植えをするたびに思いました。植え終えたときの、あの達成感は今でも忘れられません。その後ぼくは、その田んぼのそばの道を通るたび、大きくなるのを楽しみに見ていました。でも稲は、ただ育つのではなく、水の管理などが大切だと祖母から聞きました。夏には、あの小さな苗が青々と育ち、ぼくのこしぐらゐまで伸びていました。稲ほが顔を出したときは、みんなに教えたいくらいうれしかったです。稲の花が咲き、稲ほが垂れ、稲ほがきつね色に染まってくると、とてもワクワクしました。

そして、待ちに待った稲刈りの日が来ました。稲をつかんで鎌で根元の方を切りました。ぼくは、稲を刈った時に、「よくここまで大きく育ってくれたなあ。」と思いました。農家の人は、みんなこのような気持ちになるのだらうと思いました。

この一年、農業科を学んで、農業の楽しさや管理などの大変さ、そして、大切さを深く知りました。ぼくの家にも田んぼや畑があります。これからは、家の田んぼや畑の手伝いをしながら、農業と一緒に生活していきたいと思いました。ぼくは、この事を通して、これからも農業という物を大切にしていきたいと思いました。さらに言えば、この事を子孫にも、そして、そのさらに子孫へと伝えていきたいと思いました。ぼくは、農業という物は、人と人をつないでいく物だと思いました。

これまでの農業科について

姥堂小学校 六年 手代木 聡太

ぼくは、これまでの農業科の学習を通じてたくさんの事を学びました。例えば、ミミズや幼虫などの、ぼくにとつ

て今まで気持ちの悪い虫は、畑の土を耕し農作物をたくさん育ててくれる事や、土のかわきやその日の天気の変化などで、水をくれる量や作物の生長が進んだりおそくなったりの事が分かりました。これらの事は、自分で調べたり観察したり、支援員の方から教えてもらった事です。自分の家は、主に米などの作物を育てているけれども、農業科で初めて知った事が多く、すごいなと思いました。また、おどろいた事も多く、じゃがいもの種いもは、半分に切つて、切り口を上にして植えた方が、じょうぶに育つと教えてもらった事です。ですが、自分では少し半信半疑でしたが、実際に教えてもらったとおりに、じょうぶにたくさん育ったので、すごいと思いました。

夏や秋の時期は、みんなで協力して、水くれや草むしり、作物の収穫などを行い、手などがよれたり虫にさされたりもしたけれども、みんなでやれる事がおもしろくて、楽しかったです。また、自分達で育てた綿は、予想以上にたくさん収穫でき、みんなで喜びました。そして、夏休みの間に出来たすいかは、熟しすぎていたり、まだ十分に熟していなかったりした物が多く、いつ収穫してよいのかが分からなかったので、今度またすいかを作る時は、ちゃんと収穫する時の事を知りたいです。

農業科は、土やどろで手や足などがよれたり、とても大変で疲れる学習だけれども、作物を育て収穫する喜びや、野菜や米などを作ってくれている農家の方が苦労している事などが感じられる大切な教科だと思いました。今週、最後になった白菜の収穫をしました。学校のは小さくて、うちの白菜のように丸まりませんでした。これも疑問なので、調べてみたいと思います。農業は、次々に分らない事が生まれる学習です。

感謝の気持ちを伝える大切さ

駒形小学校 六年 猪俣 美月

私の家は、兼業農家。じいちゃんが一生懸命育ててくれたお米は、とてもおいしく、私の自慢です。でも、私はあまり手伝ったことは、ありません。去年と今年、米作りを学校で体験しましたが、友達と一緒にやるならまだしも、一人でやるのは大変だし節々が痛くなる。じいちゃんはずえ毎年できるのだろう。

そこで、農業を続けるための秘けつをじいちゃんに聞いてみました。そしたら、

「食べてくれた人の笑顔と、おいしかったやごちそう様な
どの言葉が、つらいことや大変なことを楽しいことに変
えるんだよ。」

そこで私は、収穫感謝祭の時に、地域の方に言われたこ
とを思い出しました。

「ごちそう様。」

「お米、おいしかったよ。」

私はその言葉を聞いて、心がなんだかほかほかと温くな
ったように感じました。それと同時に、米作りの時の苦労
や楽しさを思い出しました。

五月の終わりが、寒くてぶるぶるとふるえて、思う
ように体が動かなくて失敗してドロだらけになりながらも
一生懸命に苗をたくさん植えた田植えのこと、重いころば
しを筋肉痛になるくらい力いっぱい押して草を取り除いた
除草のこと。腰が痛くなりながらも「おいしいお米のた
め」と、稲を刈ったり、稲をまとめた稲刈りのこと。
今思い返してみると、大変なこともいっぱいあったけど、
確かにじいちゃんが言っていた通りにそんなことは、食べ
てくれた人の笑顔を見たら、来年も作ってみようかなとい
う気持ちになりました。そして言葉を伝える大切さと言葉
の力の大きさを改めて感じました。

私は、おいしいお米を作ってくれているじいちゃんに感
謝の気持ちを伝えるとともに、一人でやるより一緒にやつ
た方が楽しいので、これからは、できる限り米作りを手伝
いたいと思います。

サトイモが教えてくれたこと

山都小学校 六年 平井 理子

私は、今年の農業科を通してたくさんのことを学びまし
た。毎年力強く育って私達に喜びや希望を与えてくれる作
物。今年も大切なことを教えてくれました。

五月、六年生はサトイモの種芋を植えました。手のひら
に乗った丸々とした種芋。今年もおいしい作物がとれます
ようにと、願いをこめて植えました。それから季節が変わ
るにつれてサトイモはぐんぐん成長していきました。順調
に育つサトイモからは、生きるエネルギーがにじみ出てい
るようです。しかし、たくさん降った雨の影響で、周りが
雑草だらけになっていました。真夏の太陽が照りつける中
での草むしり。こしをずっとかがめているつらさと暑さで
(ああ、やりたくないなあ。)と正直思いました。しかし、

【農業科賞】

虫との命のわかちあい

第一小学校 三年 山本 実穂

そんな気持ちを一緒に作業する友達が打ち消してくれました。みんなと協力して作業することで、声のかけ合いや進んでやる人が増え、畑全体が明るい雰囲気であふれました。私自身も（みんなで農作業するって楽しい。）という気持ちになりました。そして、雑草もきれいになくなりました。

十一月、いよいよサトイモの収穫です。のびた茎を切り、根をほりおこしてみると。なんとそこには、手でかかえきれない程大きな根元にたくさんのサトイモがついていました。畑全体でとれたサトイモの数は九百個にもなり、がんばって世話をしてよかったという気持ちが心の中からわき上がってきました。とれたサトイモはみんなで調理をし、伝統料理「こづゆ」にして食べました。心をこめて育てたサトイモの特別な味はいつまで経っても忘れられないと思います。と同時に、いつも口にある物を作るのは、とても大変だということを実感させられました。

この一年間の農業科は、私に農業の楽しさや食べ物のあるがたみなどたくさんの大切なことを教えてくれました。これからも、農業の大切さを感じながら生活していきたいです。

「あつ、虫にくわれてる。」

大豆のしゅうかくにいった日のことでした。つぎに、

「しかも実が小さいね。」

ことみちゃんがいました。

「しゅうかくするじきになったんだけど…。」

先生も横からいました。

わたしたち三年生は、農業科で大豆を育てました。しずんだきもちでしゅうかくをはじめました。すると、「もぞもぞ」とミミズが顔を出しています。わたしは、ふと、おばちゃんにいわれた言葉を思い出しました。

「ミミズがいるってことは、いい土なんだよ。」

てことは、ここの土もいい土なんだと思いました。

くきとさやをわけているとき、見ためより、虫にくわれていました。わたしは、とてもがっかりしました。いっしょうけんめいそだてたのに、なんで？わたしはふしぎでたまりませんでした。学校に帰って、三年生のとった大豆の

重さが発表されます。わたしの予想は七キログラムです。

「三年生のお豆は、十キログラムです。」

と先生がいました。わたしは、とってもびっくりしました。どんどん、虫が大豆をたべた意味が分かってきました。「たくさんとれたね。」

美月ちゃんがいってくれました。わたしは、さいしょあんなにおちこんでいたのに、いまになってとてもよろこんでいます。自分のことがふしぎです。給食の時間、食べてみたら、だいぶ小さいけどあまくておいしかったです。わたしは、虫がたべたりゆうがやつと分かりました。これが「虫との命のわかちあい」だと思います。

これをきっかけに、わたしは、お母さんが作ったやさいがとてもおいしくかんじます。これは、大豆を育ててそのくろうがわかったからだと思いました。

さつまいもを育てて食べたよ

第三小学校 三年 小檜山 将人

ぼくは農業科でさつまいもの育て方を知ることができました。

さつまいも植えるは、まず、葉っぱみたいな物をねせて植えて、土をかぶせました。葉っぱみたいな物は、さつまいものくきと葉っぱだそうです。土は、三分の二くらいかけました。それから毎日、水をやりました。植えたばかりの時はぐったりして、本当に根っこが出てくるのかしんぱいでした。ある朝水くれに行った時、さつまいものめがぴんと上を向いていたのを見て、ぼくは心の中で「やった。」と言いました。次の水くれ当番の時に見たら、前に来た時よりも大きくなっていたので、心の中でもっと大きく「やった。」と言いました。それからさつまいもは太陽の光をあびてどんどん成長していきました。

いもほりの日が来た時、ぼくは「やつととれる時が来たんだなあ。」と思いました。さいしょに、松の子はんのはんちようさんがスコップを土に入れて、ほりやすくしてくれました。ぼくがさつまいもをほっていたら、しえん員さんが、

「おくに手を入れるとかんたんにはれるよ。」

と教えてくれたので、言われた通りにやってみると、かんたんにぬけました。自分で植えたさつまいもがとくに大きかったの、うれしかったです。

しゅうかくさいの時に、ぼくたちのはんはジャガバター

とカレーを作りました。それを食べた時、ぼくは思わず、「うまい。」

と言いました。ぼくは野さいがきらいだったけど、みんなで育てた野さいはおいしいと思いました。しえん員のおじいちゃんとおばあちゃんもいっしょに食べました。育てた野さいを、みんなで食べるとおいしいということも分かりました。みんなで育てた野さいは、えいようがいっぱいです。これからは、かんしやして食べたいと思います。

さつまいをしゅうかくしてうれしかったこと

第三小学校 三年 佐藤 晴都

ぼくは、さつまいをしゅうかくした時、とてもうれしかったことが二つあります。一つ目は、思ったよりさつまいもが大きく、たくさんしゅうかくできたことです。二つ目は、そのさつまいをしゅうかくさいでおいしく食べられたことです。

ぼくは農業科で学習をする時、

「かんたんだろうなあ。」

と書いていました。ところが、はじめてみたら、思ってい

たよりもかなりむずかしいことがわかりました。むずかしかったところは、さつまいもの植え方です。花のなえを植える時のようにまっすぐに植えればいいと思っていたのが、横にねせて少しなめに植えなければいけません。それも土をかぶせるのは、三分の二くらいだそうです。さつまいものなえが落ち着くまで、水やりを毎日かさず行わなければならぬことも大へんでした。いもほりも、なかなかほり出せなくて、思っていたほどかんたんな事ではありませんでした。

農業のすごいところは、一生けんめいやっている、終わった時に、楽しかったなあと思えることです。今まで農業をしたことがない人でも楽しいと思えます。お店で見たこともないような、大きくてりっぱなさつまいをしゅうかくできて、ぼくは、がんばってやってよかったなあと思いました。家に持って帰ったら、家族もとてもよろこんでくれました。

しゅうかくさいでは、ぼくのはんは、カレーうどんとやさしいもを作って食べました。カレーもやさしいも、今まで食べたものとはくらべものにならないくらいおいしかったです。特に、自分たちで作ったやさいはすごくおいしかったです。今回は、ようち園児もまぜて食べました。ようち

園の子どもたちも、みんな「おいしい。」と言って食べてくれました。来年もおいしいやさいを作って、しょうたいしたいです。今から、来年が楽しみです。

きなこ作り

関柴小学校 三年 宇津木 史織

今年の六月の総合学習で学校の畑に大豆のたねをまきました。

たねを見た時に、赤い色をしていたので、おどろきました。

「ハトは、赤い色がきれいなのでまいたたねが食べられないようにしているんだよ。」

と、しえん員の方が教えてくださいました。

たねをまく時も、

「こうするんだよ。」

と、やさしくせつ明して下さったので、とても分かりやすくまく事ができました。

時々、畑に行って、大豆のせい長を見ながら記ろくをつけました。そのたびに友だちと

「大きくなったね。」

「まだ小さいけど豆ができているよ。」

と、言いながら育つのが楽しみでした。

秋になって、豆がかれてきたころ、先生に

「みんなは、大豆で何を作りたいですか。」

と、しつ問されて、「なっ豆。」「みそ。」「しょう油。」「豆ふ。」「きなこ。」「いり豆。」などの意見が出ました。「大豆ってこんなにたくさんのができるんだ。」とワクワクしました。

しゅうかくの時は、からがチクチクしていたくて、はこぶのが大へんでした。

五、六年生のしゅうかくさいで、もちをついたので、それに合わせてきなこを作る事になりました。豆をいって石うすでひくときなこができました。石うすを使うのが初めてで、回すのがとても重かったです。買ったきなことは、全ぜんちがつていました。

もちにきなこをつけた物を私はおばあちゃんに持って帰りました。

「石うすでひいたきなこなんて、初めて食べたよ。豆のかおりがしておいしいね。」

と言ってくれました。

手作りきなこは、ザラザラしているけど、自分たちの手で、豆作りから始めたので感動しました。

そして、何よりも関柴小学校で初めての手作りきなこにちようせん出来てよかったです。

がんばった野さい作り

豊川小学校 三年 小森 奏

ぼくたちは、えだ豆とカボチャ、ジャガイモを作りました。

えだ豆のしゅうかくは、くきが太かったから友だちといっしょにやりました。いっしょにくきをひっぱったら、かんとんにできました。やっぱり一人でやるよりも友だちときょう力した方がいいなと思いました。その後、えだ豆とりをしました。これも友だちときょう力してやりました。これも一人の時よりも早くできました。友だちっていいなあ。今日は、ぼくがみんなを手つだつてあげたいです。

カボチャパーティーでは、カボチャのに物とカボチャのスープ、ゆでたジャガイモなどを調理しました。ぼくたちは、えだ豆をゆでました。味見などもしました。とっても

おいしい豆ができました。えだ豆をざるにすくいました。いいにおいでした。

でき上がったので、いよいよみんなで食べました。ゆでたジャガイモは、しおをつけて食べました。カボチャのきらいなぼくでも、カボチャのに物やスープを食べることができました。いつも食べているものよりもとってもおいしかったです。えだ豆もとってもおいしかったです。

おいしい野さいを作れたのは、しえん員さんきょう力員さんの細田さん、立川さん、小林さんが手つだつてくれたからだと思います。いろいろなお世話をしてくれたり水くれをしてくれたりしました。細田さん、小林さん、立川さんに感じやしたいと思います。

ぼくは、自ぜんはすごいと思います。水などをあげるだけでどんどん成長するなんて、とてもすごいと思いました。今ど農きょう科で教わったことを生かして、おばあちゃんの野さい作りの手つだいやお母さんの料理作りを手つだいたいと思います。農きょう科の学習は、とっても生活に役立ったと思います。ぼくが大人になったら、農きょう科をやるのに農きょう科で学習したことを生かして、がんばりたいです。楽しかったです。

すごいなあ農ぎよう科

豊川小学校 三年 佐原 凜香

わたしは、農ぎよう科を学習して、心にのこっていることがあります。それは、農ぎようの楽しさと大へんさです。はじめは、たねまきでわくわくしていました。でも、たねまきの前には、マルチをかけたり、たねまきの後には、草むしりやお水をあげたりとやることがいっぱいでした。やった後は、うでや足がいたくなりました。わたしは、やっぱり農ぎようは、楽しいこともあるけど、大へんなこともあると気づきました。

さらに、農ぎようには、すばらしいこともありました。それは、人をよろこばせることができます。その人が作った野さいをみんなが食べて「おいしい」と感じてもらえることです。

わたしの家は、農家です。おじいちゃんとおばあちゃんは、いつも大へんそうにおしごとをしています。その中で、おばあちゃんとひいおばあちゃんは、野さいを育てています。いつもお水をあげに行ったり、草むしりをしたりして、野さいのお世話をしています。わたしは、おばあちゃんとひいおばあちゃんたちの野さいを毎朝食べています。キュ

ウリやトマト、ホウレンソウや大こん。わたしは、野さいが大すきです。いつも「おいしい、おいしい」と言いながら食べています。

わたしは、農ぎようっていいなあと思います。そして、すごいと思います。農ぎようは、しゅうかくする楽しさや大へんさを知らせること、人をよろこばせることというすばらしい力を持っているからです。

農ぎよう科をやって一番楽しかったこと、それは自分たちで育てた野さいを食べられたことです。ゆでたえだ豆とやいたカボチャ、野さいのスープ、とってもおいしかったです。今どは、おばあちゃんたちのお手つだいをやりたいです。たねまき、水やり、草むしりを手つだってまたおいしい野さいをたくさん作りたいです。

とてもたいへんな農業

加納小学校 三年 遠藤 紀香

わたしは、さいしょは「農業はかんたんだ。」と思っていました。でも実さいやってみると、とてもたいへんでした。だけど、とても楽しかったです。

さいしよに作ったのは、じゃがいもでした。びっくりしたのは、たねがじゃがいもを半分に切った物だったことです。しゅうかくした時、一つのたねいものまわりに大きなじゃがいもがいっぱいについていたのもびっくりしました。

一番くやしかったのはトウモロコシのしゅうかくです。トウモロコシのしゅうかくはとても楽しみでした。ただ前日カラスが食べてしまつてとてもくやしかったです。私の家では米を作っています。私の家で、あいがももかっています。あいがもは田んぼの力になっていますが、からすにおそわれたりします。だから同じ気持ちだなと実かんしました。しえん員の岩下先生がカラスに食べられないようにトウモロコシにネットをかけることを教えてくれました。二回目のしゅうかくでは、きれいなトウモロコシがとれました。作戦がせいこうしてうれしかったです。

一番たいへんだったのは、はくさいの世話です。はくさいは青虫がやってきて食べてしまうので虫とりをはじめました。学校に着くとすぐ畑にいつて青虫やたまごをとりました。虫を死なせるのはかわいそうでしたが野さいのためにはがんばりました。だけどしえん員の遠藤さんたちは、「食べられたのはそのまま。食べに来たということはおいしいしよこ。」

とっていました。わたしは虫にやさしいなと思いました。虫にもはくさいにも命があることに気がつきました。

この一年間野菜作りはとてみたいへんでした。だけど、くふうしてやってきました。来年は今の二年生にいろいろ教えてあげたいです。

さつまいものひみつ

塩川小学校 三年 山内 萌花

「おいしいね。」

「ほんとどおいしいね。」

自分たちが、育て、自分たちの手でとったサツマイモの味は、とてもおいしいものでした。これまで育ててきた事をふり返ってみると、サツマイモを育てる事を通して、いくつかのひみつを見つける事ができました。

一つ目のひみつは、サツマイモは、やせた土地に強いから、あまり水をあげなくても、元気に育つという事です。七月に入つて、暑い日がつづいた時、友だちとサツマイモのなえがしんばいで見に行くと、元気にすくすくと緑色の葉をのばしながら立つすがたに、おどろいた事を今でもは

つきりおぼえています。

二つ目のひみつは、サツマイモをほり出そうとした時、サツマイモの土を手でのぞいていくと、サツマイモが横になつてならんでいました。わたしはたてにのびていくんだと思つていたので、その様子を見てびっくりしました。横にのびていけば、畑を深くたがやさなくてもよいので、べんりだなと思いました。

三つ目のひみつは、サツマイモの皮は、とてもうすいで、あらつてむすだけで、皮ごとおいしく食べられ、その上、えいようも高いという事です。

わたしは、植物を育てるという事は、ひみつを見つけ、かいけつできる事だと知りました。わたしのすんでいる家のまわりには、たくさんのおいしがあり、じゃがいもやねぎ、えだ豆、とうもろこしなどを作っている人たちがいます。今回の、サツマイモ作りを通して味わった楽しさをもっと大きくするために、近くにすむ農家の人たちから力をかりてちがうしゅるいの植物を、育ててみようと思ひました。

たくましいピーマン

高郷小学校 三年 高野 莉空

ぼくたちは、ピーマン・トウモロコシ・えだ豆・オクラ・ラッカセイ・ししとう・トマトを育てました。その中でも一番ぼくの心にのこつたのは、ピーマンです。ピーマンとは、にがくてきらわれる事も多いのですが、とてもたくましい野さいです。だけど、ぼくたちは、朝と夕方水くれに行かなくて遊んでばかりで、先生に

「水くれ、行つた。」

ときかれたら、

「あつ。」

と言つてすぐ行くような感じでやつていました。でも、それでもピーマンは、農ぎよう科で行くたびに、いっぱいになっていました。けれど、トウモロコシ・えだ豆・トマトは、だめでした。その中でピーマンは、力強く、たくましく生きていました。ピーマンは、すぐくいっぱいになっていて、みんなで山分けしたり、チンジャオロースを作つたりしました。ぼくは、こんなにピーマンはがんばつてたくましく生きているのに、なぜそんなにみんなにきらわれているのかわかります。それは、にがみです。ぼくも二年

生ぐらいの時は、ピーマンを食べると、にがみが口の中にひろがって思わず、

「苦っ。」

と言ってしまいました。でも、ピーマンを育てていくにつれ、ピーマンが食べれるようになりました。ぼくは、だんだんピーマンがかわいそうになってきました。今では、ぼくは、なぜピーマンを食べた時に、

「苦っ。」

と言ってしまったのだろうと、こうかいています。ぼくは、ピーマンとぼくたちをくらべて、ピーマンをお手本にしています。そして、ピーマンがきゅう食に出た時はありますが、この気持ちで今は食べています。

自然の力で育ったくりかぼちや

第一小学校 四年 小澤 歩波

わたしたちが八月にしゅうかくできたかぼちやは五つでした。六月に四十本以上のかぼちやのなえを植えたので、予想では百こくらいできるかなと思っていたのですが、

畑はざっ草だらけでした。かぼちやは、葉やくきがくさ

って切れていました。かぼちやがなつていても、そのほとんどがオレンジ色になっていてぐちゃぐちゃでした。数少ないしゅうかくできそうなかぼちやの実、つるが太陽の光が当たる草の少ないところにまでのびてきたものです。生き残ろうとがんばったんだなと思いました。

このようなことになってしまった理由の一つに天候が関係しているのかなと思いました。今年の夏は、とても暑い日が多かったのですが、雨も多くふりました。そのため、ざっ草がたくさん生えてかぼちやに栄養や光がとどかなかったのかなと思いました。また、雨のせいで水分が多くなりすぎて、根やくきだけでなく、せっかく実ったかぼちやもほとんどがくさってしまったのかなと思いました。

くさらずに残っていたかぼちやの実の生命力におどろきました。それと同時に農家の方は、たくさんの手間をかけて育てているからおいしい野菜がくれるのだなと思いました。雨が多すぎたらわらをしいたり、ぎやくに雨が足りなかったら水をやったりしているのだらうと思います。また、太陽の光が植えた野菜のすみずみにまで当たるように、ざっ草が生えないようにしたり、栄養がたくさんいくように土をたがやしたり、ひりょうをやったりしているんだらうなと思います。

しゅうかくできた五つのかぼちゃから、ふだん何気なく食べている野菜やお米は、作っている方のたくさんの工夫や手間やあいじょうがはいっているものだと思いました。これからは残さず食べるようにしたいと思います。

農業と気候の関わり

第一小学校 四年 樋口 美穂

四年生のわたしたちは、今年、かぼちやを育てる活動に取り組みました。まず始めに、かぼちやはどんな野菜なのかを調べました。すると、かぼちやは漢字で南の瓜と書くことや、アメリカ大陸がふるさとだということが分かりました。

かぼちやの苗をよく見ると、まだまだ小さいのに、すでにつぼみがあり、くきはちくちくしていました。

実際に畑に植えてからは雨が多く、なかなか様子は見に行けないほどでした。それから暑かったものの、いつもの年より雨が多い夏でした。

二学期をむかえ、しゅうかくを楽しみに畑に行くと、実のなっているものは少なく、見えたのはざっ草ばかりでし

た。しえん員さんの話によると、雨がふり続いたため、かぼちやがくさってしまったそうです。また、実ができた物も、動物などに食べられてしまったということでした。

そういえば、三年生のときに育てた大豆は、その夏、もう暑が続く、実は小さくてかたいものが多かったのをおぼえています。今年のかぼちやは、雨が多くてくさってしまったので、天気は作物の育ちにえいきょうをあたえてしまうことがよく分かりました。雨もふりすぎず、暑すぎないちようどよい気候になるのは、なかなかいいことです。さらに、動物に食べられるというひがいもありました。動物も、生きるために必死になってえさになる物をさがします。その中で、野菜を育てる農家の人が、どれだけの苦労や努力を重ねて野菜を育てているのか、わたしにも分かったような気がします。

このように自然の力があって、植物や野菜は育ちます。しかし、そのバランスはなかなか整いません。動物も食べることが必要です。

わたしは、今年の農業科の体験を通して、野菜を作ってくださった農家の方々に、感謝やをして食事をしたいために思いました。

野菜の力

第二小学校 四年 折笠 明里

わたしは、はじめて人参を作りました。これほど大きな野菜を作るのは、はじめてだったのでうれしかったです。これから、がんばっておいしい人参を作ろうと思いました。わたしは、はじめて、野菜の力を知りました。人参のたねは、小さい小さいつぶのようでした。一つぶポロツと落とすところにあるかが、分からなくなりました。そんな小さな小さな種を少しずつ、少しずつ植えていきました。何日かすると、小さな小さな芽がでてきました。なんだか、こんな小さな小さな芽なのに、心の中はいっぱいのうれしい気持ちになりました。芽は、わたしの気持ちのよう、どんどん大きくなりました。ぬいて見たときに人参が大きく育っていました。野菜はすばらしいと思いました。あんなに小さな小さなたねからこんなに大きな大きな人参になりました。でも、それはわたしたちや野菜の力だけではなく、土や、虫などの力でもそだっていくのかなあと思いました。その成長を見ていると、なんだか自分も、『がんばらなきゃいけないな。』と思うようになっていきました。

わたしは、人参をそだててよかったと思います。野菜の力、自分が思ったことというように、四年生の農業で野菜をそだてていろいろなことが分かりました。いままで書いてきたように、やっぱり、野菜の力は、すばらしいと思いました。これからも野菜をそだてるときはちゃんとよくかんさつしながら、心をこめておいしい野菜をそだてたいと思います。こんどは、もっともっと大きい野菜を作ってみたいと思います。

おいしかった冬至カボチャ

松山小学校 四年 山本 真弘

六月に小豆とカボチャを植えました。冬至カボチャを作るためです。ぼくは初めて作るので楽しみでした。小豆とカボチャを育てるとき、一番大変だったのは、ざつ草がたくさん出てきて、週に一度は、草むしりをしなければいけないことです。草をむしらないと、小豆とカボチャがかれていきます。でも、ただ草をむしればいいと思っていたら大まちがいです。初めのうちは、まだ小豆も小さいので、ざつ草とまちがえて、ぬきそうになったこともありました。

それからぼくは、農業は、むずかしいし、大変なんだなと思いました。でも、おもしろくないというわけではありません。ざつ草を、何ヶ月かむしっているときに、よく見ると、小豆の実がなっているのに気がつきました。それから、みんな、おもしろくなって朝の時間に、小豆をとりに、分たんして行きました。みんながとった小豆を合わせると、箱いっぱいになりました。

いよいよ、冬至カボチャを作る日になりました。ぼくは、この日を楽しみにしていました。小豆をにたり、カボチャを切ったりしました。小豆をにたのを食べてみると、まだ、さとうなどを入れていないので、大豆みたいな味でした。カボチャを切るとき、かたかったので大変でした。冬至カボチャに塩を入れるなんて思ってもいませんでした。それは、甘みをますためだそうです。

完成してから、みんなで食べました。

「おいしい。こんな味初めて。」

と言う声が聞こえてきました。

タッパーで家に持ち帰りました。家族のみんなに食べてもらいたかったからです。

「この冬至カボチャおいしい。こんなにおいしいの初めて食べた。」

家族がそう言うてくれて、ぼくはうれしくて、しょうがありませんでした。

野菜を作るのは大変だけど、これから、みんなに喜んでもらえる野菜作りにチャレンジしていきたいです。

楽しかった最後の野菜作り

豊川小学校 四年 遠藤 星矢

ぼくが、農業科の学習で、一番心にのこっているのは、しゅうかく祭です。だけど、しゅうかく祭の野菜を作るまでは、たくさん苦労がありました。その中でも、一番大変だったのは、里いもでした。

一番最初にやったのは、四月にやった、こやしまきです。バケツリレーみたいにやりました。こやしは土みたいで、ちよつとくさかったです。

そして、五月になると、マルチをかけ、芽出しをしました。でも、本当に芽が出るのか少し心配でした。けどそれが、六月になると、どんどん大きくなり、葉も出てきました。とても大きくなっていて、びっくりしました。小さな種から、その何倍もある葉やくきが出てきたので、植物

ってすごいと思いました。

そして八月、葉はこれまでの何倍にも大きくなり、ぼくの顔より大きくなっていてびっくりしました。葉の上にある水は、なぜかつぶれなくて、ころがして遊ぶのが楽しかったです。くきもととても太く、長くなっていました。

秋になると、しゅうかくをしました。里いもは、親いものまわりに子いもがたくさんついていて、とても重かったです。あらう時は、水が冷たくて、手の感かくがなくなっていました。

そしていよいよ、しゅうかく祭。しゅうかく祭では、豚汁を作りました。ぼくたちが作った里いもと人参、大根を入れました。そして、農業しえん員の方といっしょに食べました。自分たちが作った豚汁が、おいしくないわけがありませんでした。

他の人参や大根を作る時も、いろいろな苦労がありました。だけど、みんなで協力して作った野菜が入った豚汁は、とてもおいしかったです。

ジャガイモ作り

塩川小学校 四年 佐野 茜奈

「今年は、みんなでジャガイモを育てよう。」

という先生の話から、私たちのジャガイモ作りが始まった。私の家では、祖父母がジャガイモを作っているが、いもほりを手伝ったくらいで作り方をよく知らない。祖母に聞いたり、みんなで調べたりして植えた。先生方に畑をたがやしてもらって、黒いビニールをかけてもらった所に植えるだけなのに、穴がうまくほれなくて何回も何回もほってやっと種いもを植えた。

ジャガイモの観察をしながら、ジャガイモ作りをしている家が多いことが分かり、「どうしてジャガイモを作る家が多いのか」調べていくことになった。おいしいから、いろいろな料理に使えるから、栄養があるから、長くおけるから、世話が簡単だからなど、それぞれが課題を見つけて調べていった。

私は、栄養について調べた。ビタミンCやカリウムが豊富な食べ物ようだ。「畑のりんご」と言われるほど栄養があり、食べ物のない時代にご飯のかわりに食べられていたそう。お腹の調子をよくしてくれて便を出す働きがあ

るようだ。

ジャガイモについて調べながら、観察にも行った。観察していて一番びっくりしたことは、生長が早いことだ。少しの間にぐんぐん大きくなっていった。それから葉っぱがすっかりしていることにもおどろいた。うすいのかなあと思ってたさわってみたら、ざらざらしていたかたかった。太陽の光や雨などの水分をたくさんすってジャガイモに栄養を送っているんだなあと考えた。

私は、いろいろなジャガイモ料理、ジャガイモ作りをしている県、ジャガイモの歴史などの友達の発表を聞いて、おいしくて、栄養もあって保存もできて、作りやすいのでいろいろところで作られていることが分かった。ジャガイモ作りをしてみて、ジャガイモにくわしくなったような気がする。来年は、祖父母といっしょに作ってみたい。

田植え体験を通して

第一小学校 五年 鈴木 桃雛

私は、田植えをする日の朝、朝食を食べながら、家族と話をしていました。話の内容は、やはり田植え体験の事で

した。まだ田植えをした事のない私にとっては、人生初の経験でした。私のお母さんの実家は、農家なのでお米の事について、とても良く知っています。

「なるべく日に当たらないように。」

「土には、虫がたくさんうようよいいるからびっくりしないでね。」

などと家を出る前言っていました。田植えの経験があるからこそ言えるんだと思います。

田植え体験が始まりました。豊子さんの話が思ったより早く終わり、支援員の方のお手本を見せてもらいました。さあ、いよいよ私達の番がきます。私は、どきょうを決め、はだしでどろの中に入りました。なんと、私が予想した以上のてんかいになりました。どろがぬるぬるし、虫がたくさんいて、しりもちをつきそうになりました。このままずっといたら足がぬけなくなりそうです。私は、ふと今朝お母さんの言った言葉を思い出しました。するとそのとたん私は、なぜか、心の中が温かくなった気がしました。まるでお母さんがそばにいるみたいに。そのうちに田植え体験が終了しました。私が農家について気づいたことが一つあります。それは、みんな心をこめて作っている事です。私は、自分がきれいな物だと残してしまうくせがありました。

けれど、みんな食べる人に喜んでもらうために一生けん命作っています。今度からは、きれいな物でも一口は、食べるようにしたいです。

私は、今まで農家をしている人への感謝の気持ちなどこれっぽっちもありませんでした。好きな食べ物は、自由に食べられる。こんな事が頭にうかんでいたからです。でもよく考えてみると世の中には、食べ物が食べられなくて死んでしまう人がたくさんいます。これからは、農家の人に感謝し、食べ物を大切にしていきたいと思います。

稲を育ててみて

第二小学校 五年 宇内 愛結

「ちゃんとおちやわんについているごはんつぶも食べなさい。」

昔はよく言われていた言葉です。小さいころの私は、はしもしつかり持てなかったので、おちやわんにこびりついているごはんつぶをとるのも、一苦労だったのです。

「いやだよ。だってめんどくさいもん。」
「いって、いやがっていました。」

五年生になって稲を育てました。水と土をまぜて、田んぼの土を表現しました。肥料を入れて、苗を植えました。植えた時の苗の長さは十五センチメートルだったのに、夏休みに水をあげにいくと、九十六センチメートルになっていました。もう少しでおいつかれそうで、おどろきました。夏休みが終わり、収穫を行いました。かまを使って、稲を切っていくきます。思った以上に力が必要で、友達に手伝ってもらい、なんとか収穫しました。できたものを干して、かんそうさせました。約二週間干したら、米になる部分だけを取ります。一回できれいに取れた時は、とても気持ちいいです。米を集めて、一つのふくろに入れます。そして、教室にもっていくきます。ここからが大変です。まず、すりばちの中に米を入れます。そして、野球ボールでもみすりします。ずっとやっている、手がいたくなります。あの程度すったら、ベランダに出て、息をフーッとほきます。そうすると、からがとれて、米だけになります。これを何回もくり返すと、きれいな米だけになります。でも、どんなにがんばっても、おちやわん一ぱい分のお米にしかありませんでした。

稲を育ててみて、とても大変なんだということが分かりました。農家の人ががんばって作った米を、私は、たった

一つぶだけでもむだにしていることをこうかいしました。稲を育てる大変さを知ったので、私はめんどくさくてもちやんと一つぶ残らず食べようということと、農家の人に感謝しようと思いました。

米と命

関柴小学校 五年 上野 永遠

ぼくは、今年初めて米作りをしました。そして、米作りが終わって理科の授業をしている時に、米や野菜にも命であるのかなーと思いました。米作りをやったのを思い出すとなんだか赤ちゃんのような感じがしました。

最初の種をまいた時は、生命のたんじょうだと思いました。た。

次の田植えでは、土といねがくつつかるから精子と卵子がむすびつくところをそうぞうしました。

そして、いねかりの時は、こしがいたかったです。たえるならお母さんが赤ちゃんを産む時よりは、いたくないけれどいねを赤ちゃんだと思うとんだかうれしくなりました。いねかりをしていねを何十本か束ねてひもでむすん

だ後、いねを赤ちゃんだと思って大切に校庭まで運びました。

いねからモミをとり終えると育てたもち米をふかしてもちつきをしました。まるで大きくなるように栄養をあたえているように感じました。

ぼくは、米や野菜や食べ物には命があると米作りをして思いました。ぼくは、米つぶ一つぶものこしたくないって思ったし、野菜も好ききらいをなくして出された物は、何でも食べようと思いました。それに、食べ物を残したらせっかく生まれた食べ物の命をそまつにすることになるので、食べ物がかわいそうだ。それを作った農家の人達が悲しむから。

ぼくは、ふだん何気なく食べていた物にも命があって人間がその命をもらっているのだから食べ物をそまつにしないよう努力していきたいと思いました。

米作りを経験して

慶徳小学校 五年 武藤 峻士

ぼくは、五、六年生の農業科で、初めて田植えから白米

になるまでの様子を知る事ができました。初めての米作りなので、おいしいお米が作れるか心配に思っていました。ただど支援員の方がたくさん米作りの事について教えて下さったので、よく分かりとても楽しみになりました。

まず、春には田植えをしました。田んぼに入りみんなで手作業で苗を植えていきました。広い田に手作業での田植えはとても大変なんだなあと思いました。その後は、稲がどう育っていくのか何度か観察しました。「どうかお米が出来ますように。」と、思っていました。

秋には稲かりをしました。春に植えた緑の稲が、金色に稲穂をつけていました。かまで一たばずつ刈っていききました。ぼくは刈っている間も、「おいしいお米になったかな。」と思っていました。ずっと腰を曲げての作業でとても大変でつかれました。農業はとても重労働だと思いました。稲かりの後は、白米になるまでを支援員の方の自宅まで行き見学する事ができました。「春から秋まで大変な苦勞をしておいしい白米ができるんだなあ。」と思いました。ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんも米や野菜を作っています。おじいちゃんとおばあちゃんの田畑での仕事を見ていると、大変な仕事をずっとやってきたんだなあとびっくりしました。おじいちゃんが「田植えや稲刈りは今は機

械でやっているけど昔は、全てが手作業で、もっと大変だったんだ。」と言っていてあの広い田を手作業で全てやっていたんだとてもびっくりしました。

支援員の方と五、六年生みんなで作ったお米はとてもおいしかったです。

農業科で教わったたくさんのお事を忘れずにいたいと思います。

農業とわたし

熱塩小学校 五年 上野 華夏

わたしは、農業があんまり好きじゃありませんでした。一年生のころは、学校でやる田植えなど、何かを植えて収穫するのが、とてもおもしろかったけど、学年があがっていくうちに、農業なんてやりたくないなと思うようになりました。最初は、とてもおもしろかったけど、心の中で、農業はおもしろくないし、いいことなんて一つもないと思ってました。

わたしは、五年生になって赤飯配りというのをやりました。わたしの学校は、五年生になると、一人ぐらしのお年

よりに手紙を書いて、赤飯といっしょに配りにいく活動があります。わたしは、その赤飯配りもいやだなと思っていました。わたしは、人の前にでるときにちゃんとして、しゃべれなくなるので手紙が読めるか心配でした。そして、赤飯作りをてつだってくれた大人のひとと赤飯を配りにいきました。ちゃんと配れたと思ったけど、わたしが配りにいった家の一人のおじさんが、わたしが手紙を読んでいるときに聞きづらそうな顔をしていました。その顔をみて、わたしは、やっぱり声が小さいんだなと思いました。その顔を見たわたしは、声をその人に聞こえるように大きくしました。わたしは、手紙を読み終わった後、いろんな一人ぐらしの人に、

「ありがとう。」

と、いわれました。わたしは、いいことをした気分で学校に帰りました。

わたしは、農業学習で何かを植えたり、収穫をしたりして、あらためて、農業学習っておもしろいなと思いました。これからも、この気持ちをわすれないで、六年生になっても農業学習をたのしくやっていきたいと思います。とくに、赤飯配りは一ばんの思い出になりました。一人ぐらしのおとしよりの笑顔を、みれて、本当によかったです。これから

らも、がんばっていききたいです。

米作りをして初めて感じた

苦労とお米のありがたみ

加納小学校 五年 渡部 光

私は、今年初めて米作りをしました。田植えや稲かりをやって考えた事が二つあります。一つ目は米作りは大変だという事です。二つ目はお米を作るには長い時間がかかっていてお米のありがたさが伝わった事です。

一つ目の米作りは大変だと思った理由は、プロジェクトでの活動です。私達は、田植え稲かりなどおもな作業をしました。今まで、米作りをやった事がなかった私には、とても大変でした。一番大変だったのは、除草です。昔ながらの方法でころばしを使いました。足がぬかっけてきころびそうになって大変でした。でも、六年生や支援員の方に手伝ってもらってきれいに除草する事ができました。でも、次はスムーズにできるようにしたいです。

二つ目の、お米のありがたさも色々な活動を通して、とても感じる事ができました。今まで、私はふつうにご飯を

食べていました。でも、作ってみると七カ月ぐらいかかって私達が食べるまでは、すごく長い時間がかかっていてありがたみを感じられました。私は、ありがたさだけでなくやって良かったと思う事もありました。私達は作ったもち米でおもちを作って全校生で食べたり一人暮らしのお年よりの方々にお赤飯を届けたりもしました。みんなが笑顔になってくれたのでとてもうれしかったです。

私は、米作りをやってみて米作りの楽しさや苦勞が分かって良かったと思いました。今までは、お米はふつうにある物で毎日食べていたのでありがたいなと思った事は、ありませんでした。でも、米作り活動を通して多くの人が米作りに関わっているんだなと思いました。米一つぶ一つぶに多くの人の思いや苦勞が入っている事を知り、大切にいただきたいと思いました。

初めての農業活動

堂島小学校 五年 桑原 未有

私は今年の春まで埼玉県に住んでいました。埼玉は都会でマンションやビルがズラズラならんでいたの、テレビ

や新聞などでしか田んぼは見たことがありませんでした。しかし、福島県に引っこしてみると周りは田んぼだらけで、山もたくさんありました。そんな緑豊かな福島で、初めて田植えや稲刈りをやりました。

まず、稲は種から育ちます。小さな種もみをまいて、ふつうの植物を育てるようにします。そして、苗は常に水につかっているようにします。一か月も経つと稲の苗はすくすくとのびて、約七センチメートルにもなりました。さわってみるとさらさらしていて、なでみると気持ちいいです。苗の形は、細くて先が二つに分かれて、とてもおどろきでした。しかも、ビニールハウスの中はすごく暑く、なぜ平気なんだろうと思いました。

田植えの日がやってきました。その田んぼにはカエルやクモがたくさんいて、入るのに勇気がいりました。下級生と手をつないで入ってみると、意外にも気持ちよく笑い声が絶えませんでした。苗は二、三本ずつ十字の交わっているところに植えました。楽しかったです。一か月後に田の除草をしました。稲は田植えのころよりも大きくなっていました。除草にはころばしを使いました。ころばしは重くて、昔の人は大変だなと感じました。種をまいてから約五か月。いよいよ稲刈りの時期になりました。支援員さんに

はいつもいろいろ教えてもらい、今回もコツを教えてもらいました。ほ先にはプツプツお米のつぶがたくさんついています。そして干しておいた稲を足ぶみだっこく機とうみにかけて、米とわらに分けます。こんな機械は初めて見ですごいなと思いました。お米はもちになりとてもおいしかったです。堂島小では稲わらをわら細工にしてむだなく最後まで大切にします。

このように地域の方のご協力や米への感謝の気持ちを大切に、これからもお米をつくりたいと思います。

命を頂く事への感謝「いただきます」

駒形小学校 五年 五十嵐 陽規

僕は「いただきます。」を言う時の気持ちが変わった。

僕が二年位の時は、「いただきます。」を「ただ言えはいや。」と思って言っていた。さらに、「いただきます。」を言わずに食べてしまう時もあった。

五年生になってから農業が始まった。農業をやっている一番心が変わったのは米を自分達で作った事だ。米は八十人の手間がかかってできると聞いた時がある。なので「め

んどくさい。」と思いながらやっていた。苗植えの時は「どろでよごれるからいやだな。」と思った。けどやってみる事にした。苗を植えていると「けっこう、つかれるな。」と思った。この時は「つかれるからいやだなあ。」と思っているころだ。

数日後に除草をした。ころばしの道具を使って除草する。除草している時に「つかれた。」と思ったけど変わった事もある。「つかれた。」と思っても「いやだなあ。」と思う事はなかった。今回は一生けん命やった。僕の気持ちは「育てるのは大変だけど、食べるのが楽しみだ。」と、思った。

数か月後に稲かりを行った。稲かりは「一番つかれる。」と思ったけど「やろう。」と僕は強く思った。稲かりをしている時に六年生の顔を見てみた。すると、笑顔で「大きく育った。」と言う様な顔をしていた。植物にも命があつて、僕らはその命を食べているわけだから「いただきます。」は大切だから「これから言うようにしよう。」と思った。

僕は「しゅうかく祭」などで自分の米を食べる時に「いただきます。」を言った。僕の気持ちは命をいただく事に感謝しながら言っていた。

僕は農業のお陰で「いただきます。」の意味などを知れたのでとっても農業をやつてよかったと思う。

農業のありがたみ

山都小学校 五年 穴沢 凜子

私にとって農業とは、いつも面倒くさいという存在でした。どうしてかというと、今も働いている人達の事を考えたことがなかったからだと思っています。でも、五年生になつてから一番最初に農業科の勉強で行つたカボチャの収穫の時は、農業の本当のつらさや楽しさが分かった気がしました。

五月の末、なくしてしまうくらい小さい粒を先生に渡されました。これがカボチャの種か。始めはあまりの小ささにびっくりしていたけど、これを私が育てて大きくなるのと不安と楽しみでむねがいっぱいになっていました。外に出て、種をまいている時は、

「こんなの、簡単じゃん。」

と心の中で思っていました。それから水やりや草むしり、思ったとおり面倒くさかったです。

学校のある行事で、「貧困の中で生きる子ども達」という、フィリピンの事を東京から来た「青木さん」という人に教えてもらいました。子ども達が、ごみをあさつてお金になる物をさがし、それでかせいだお金でお米を買い、ほんの少しのお米を家族で分けて食べるのです。私は、こんなにひどい国があるのに、あたり前に食べ物を残したり、すてたりしていいのか。日本は、自分の家の人にお米をたいてもらつておなかいっぱい食べるのがあたりまえ。日本であたり前のことが、フィリピンでは夢にも考えられないことなのです。これを見た時は、本当に本当にかわいそうだと思いました。

八月の末、カボチャの種が大きな実になり、みんなでむしぱんと煮つけにしておいしく食べました。その時は、農業のありがたみが分かった気がしました。

これまでをふり返って考えてみると、私達は何て幸せなんだということが感じられます。これだけは忘れないようにしたいと、強く思いました。

野菜のおいしさと命の尊さを伝える

第二小学校 六年 外島 美瑠

「これじゃない。」

このとき、命の尊さを知らなかった私の口から出た言葉でした。

今年は四年目の農業体験。今回は、ジャガイモ、大根、白菜の三種類でした。

ジャガイモは、一学期の初めに植え、二学期の初めに収穫しました。本当ならば、夏休み中にやる予定だったけど、雨によって延期になりました。このときに農業のきびしさを思い知らされました。白菜と大根はジャガイモの収穫が終わった後に植えたけど、大根は、大きく育たないし、白菜は、丸く成長しないから二学期の下旬に収穫しました。

十一月の下旬ごろに、収穫感謝祭をしました。そのときに、とん汁を作りました。感謝祭の会場作りととん汁作りの班に分かれ、私はとん汁作りを担当しました。おいしくなるために頑張りました。とてもおいしくできました。

私は、自分達で愛情こめて育てた、ジャガイモや白菜、大根をまた自分達でおいしく調理することができ、とてもうれしく思いました。

このことも含め、野菜を大きく育てるまでの苦労、そしてその野菜を愛情をこめて作っている農家の人々に感謝をしなくちゃいけないのに、

「これじゃない。」

と言ってしまうので、感謝の気持ちは、忘れてはいけないうちで思いました。これは他のことでも同じです。親が私のことを思っただけで、反抗して、口論になってしまいます。私は、大切に育ててもらっている親に感謝しながら、たくましい大人になっていきたいです。

人は、食べ物がないと死んでしまいます。だからこそ、野菜のおいしさや農家の人々に感謝し、残さずおいしい食べ物をついばい食べて、大きく立派な大人に成長していきたいです。

六年間の農業科体験で学んだこと

上三宮小学校 六年 田中 桃葉

私達の上三宮小学校は、農業がさかんな地区にあります。しかし、農業科で学ぶまで、私は一度も農業の体験をしたことはありませんでした。農業科の授業は、私達が一年生

の時に始まりました。

最初は、何が何だかわかりませんでした。農業科なんて初めてで、意味がわからず、不安な気持ちだったことを覚えていきます。初めての農業科体験の時のことです。田んぼに足を入れると聞いて、私はとてもおどろきました。

「あの、ねちよねちよしていると足を入れるなんてできない。」

と思い、とても不安でした。そして田んぼに足を入れてみると思ったとおりでした。けれども、稲の苗を植えるということは大変な作業で、足の感しよくが気持ち悪いなんて言っていられないと思いました。一年生の時は、植え方が下手で、支援員の人達に迷わくをかけてしまいました。

でも、現在、私は六年生です。今まで、六年間農業科作業を行い、ずいぶんと農業の知識が身につきました。六年間の学習を通して、私は稲の苗の命について考えるようになりました。私達人間が命を持っているように、わずかにセンチメートルの稲の苗も命を持ち、生きているのだと思います。私は、自分の手で命を育てていくのです。苗を植えるながら「これはとてもすごいことをしているんだ。」と感じました。そして、今回の田植えは前と違って意気込みが違いました。なぜなら、小学校生活最後の田植えだった

からです。その田植えでは、もう支援員さんといっしょに農業ができないことと、稲や作物をこの上三宮小学校で育てられないのだというさびしさがありません。そうしたいを感じながら、私は、一本一本心を込めて苗を植えました。

私は、この六年間の中で「農業」って楽しいんだな、すばらしいな、すごいなと思った出来事がいっぱいありました。だから、農業の楽しさを未来にも伝えていきたいです。

失敗から思ったこと

上三宮小学校 六年 高橋 由羽

私達六年生は今年、全校生で育てる稲とは別に、バケツで稲を育てました。

いままでの農業科は、田植え、稲かり、脱穀の他、水やりなどは全て、支援員さん達がやって下さっていましたが、バケツ稲は、そういった事も全て自分達でやらなければいけません。毎朝の水やりや草むしり。三日坊主の私には、続けられるか心配でしたが、この稲のためだと思うと、不思議とやる気がわいてきました。

しかし、九月に入って陸上練習が始まると、水をあげられない日が多くなりました。陸上大会という大きな大会に出場するというプレッシャーから、心にも余裕がなく、バケツ稲の存在すらも忘れることができました。

それでも稲達は強く、たくましく育っていました。その様子を見て、私は内心ほっとしていました。ところが、やはり水が原因だったのでしょうか。稲の三分の一くらいが病気になるてしまいました。

十一月後半に、学級で脱穀をしました。私と友達とで育てた稲には、ちゃんとお米になっているもの、なっていないものがありました。「もしもあの時、私がちゃんと水をあげていれば、育てていたお米全てが、おいしく食べられたのに。」そう思うと、うまくできなかったお米達に対して、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

この経験から、私は改めてお米をつくる大変さと、一つぶ一つのお米の大切さを確かにかみしめながら、おいしく食べれることの幸せを感じました。これからは、何事にも一生けん命取り組み、継続することを心がけたいです。そして、いくつもの苦労を重ねながら、私達のもとまでおいしいお米を届けて下さる全ての人に感謝したいと思います。

米作りのバトン

豊川小学校 六年 小椋 悠斗

米作り。ぼくにとっては二回目の活動でした。二回目は農業の昔と今を考える年になりました。一つ目は、田植えの前に苗を植える目印を作るライン引きです。今は機械できれいに植えることができますが、昔はどうしていたのだろうと思いました。すると農業科支援員の方が、条板というものをとり出してラインを引くことを教えてくださいました。やってみると、ラインは引けるのですが、植えるときに田んぼの中でラインをふんでしまうことが多く、どこに植えていいかわからなくなっていました。田植え後の田んぼを見ると、苗がバラバラでした。昔の人が、きれいにやっていたことにすごいと思いました。二つ目は、草とりです。これこそ手作業だと思っていたら、「ころばし」というものを使いました。「ころばし」の動かし方を知り、ぼくはなるほどと思いました。昔の人はいろいろな知恵を出して作業効率をあげようとしていたのだと思いました。

農業は日々進化しています。弥生時代から続く米作りは、人々の知恵で受け継がれ、より便利に、よりおいしいお米

ができるようになってきていることと思います。ここまでくるには、大変な努力が必要だったことでしょう。昔の人の手作業があったからこそ、その大変さを補うために考える人がいて、機械化や米の品種改良などの進化をとげてきたのだと思います。今ぼくたちがおいしいお米を食べられるのは昔の人々のおかげだと思います。

今、全国では田んぼが減っています。日本の主食となる米を作る人が減っていると学習しました。いくら昔より楽になったとは言え生き物や自然相手の仕事です。苦労は多いでしょう。ぼくの通学路には田んぼが広がり、それは美しいものです。そして何より自分達でつくったお米は最高にうまいです。弥生時代から続く米作り。平成の僕も次の時代にバトンを渡したいです。まずは祖母の田を手伝おうと思います。農業科を学んだ者として。

米作りの思い出

慶徳小学校 六年 齋藤 優斗

「今年も新米が食べられる。」

ぼくは登下校中バスの窓から一粒、一粒の穂の黄金色の

稲をながめていました。稲かりの時期になると、どの家も忙しい毎日です。

ぼく達も高学年になって二年目になります。農業科では米作りの体験を慶徳小専用の田んぼで行っています。支援員さんの協力や応援で米作りをしています。始めの頃は、どろどろの田に入るのもやっとで苗植えも手作業なのであきつぽいぼくにとっては、とてもつらく、こしの痛さにも泣きたくなるくらいでした。でも六年になってからは、恐れていた田に入るのも楽しみに変わり、田植えも自分達で作る米だからとがんばって植えました。

秋に、稲を刈るこの時期は、チクチクしたりするけど、稲のこうばしい香がたまりません。一束、一束心をこめて少人数だけど、皆と一緒に刈るのだからがんばりました。

そしておいしいお米ができました。米には二種類ありますが、ぼく達が作った米は、コシヒカリです。収穫祭でぼく達が炊いた炊飯器からは、いいにおいがただよってきました。炊きたたのご飯は一粒一粒がキラキラ輝いています。ふつくらととてもおいしそうです。自分達の作ったご飯は、おかずがなくてもちよつと甘くておいしかったです。お米一粒にも作った人が心をこめて作っているということがわかりました。台風などの影響でなぎたおされていた

稲もありました。でも、どの稲も必死に伸びていました。農業科を学習して、米作りはたくさんの方の作業があり、とても大変だとわかりました。それでも農家の人は、喜んで食べてもらえるようにがんばっているんだと思います。ぼくも作ってくださった農家のみなさんの気持ちを知り、これから一粒一粒感謝しながら味わいたいと思います。

農業学習で学んだ命の大切さ

熱塩小学校 六年 遠藤 伶菜

私たちの学校では、総合的な学習の時間に農業科の学習をしています。支援員さんの小林芳正さん、菅井光信さんに教えていただいています。六年生は二人の支援員さんの家にファームステイで農業のお手伝いに行きました。私は菅井さんの家に行きました。そこで菅井さんにすばらしい話を聞きました。

「一般の会社と農業の違いは分かりますか。」

と聞かれました。私は

「天候に左右されやすい。」

と答えました。菅井さんに

「それも当たりだね。」

と言われました。私たちは分からなかったので菅井さんの考えを聞きました。菅井さんは

「人間の命を直接守るのが農業。一般の会社は直接の命は守らないが、物を買うお金をもらって命を守っている。」

と言っていました。私はこの言葉を聞いて改めて命の大切さが分かりました。

私は、今年一年間の農業学習の中で、全校生で行った稲刈りがとても大変でした。理由は、五、六年生的人数が合わせて十四人しかいないからです。五、六年生は稲を刈る担当でした。稲を刈っても刈っても稲が減らないので、（もうこれじゃいつまでたっても終わらないな。）とやる気をなくしてしまいました。でも、下級生が稲をたばねたり、運んだりとがんばっている姿を見て（下級生ががんばっているんだから、私もがんばろう。）と思いました。そう思っているうちに稲刈りも終わりました。終わった時の達成感も気持ちが良かったし、みんなの顔にも笑顔があらわれていました。（農業ってすごい。）と思いました。そう思っているうちに、先ほどまであきらめていた自分がなさけなくなりました。

私は、稲刈りを通して自分の心もきたえられたと思えます。これからも農業科で学んだことを、色々なことに役立てたいです。そして、人間の命はもちろん、野菜の命を大切にしていきたいです。

農業科の学習を通して

駒形小学校 六年 大川原 真叶

ぼくの家は兼業農家で、祖父が中心になって行っています。休日には、父も稲刈りなどを手伝いますが、ぼくはあまり手伝いませんでした。だから、学校で農業の活動を行って初めて、農業の大変さや喜びを知ることができました。

まずは、畑仕事。ぼく達六年生は、今年、ジャガイモとサツマイモを育てました。夏休みにジャガイモをほったら、雨などの影響と土地の条件で、五百円玉位の大きさのジャガイモしか出てきませんでした。毎年同じように収穫できるわけではないことを知りました。サツマイモは、すごい大きな物が収穫できました。見つけた時には、うれしくて、「ここにでっかいのあるよー。」

と、一年生にもどったような声を出していました。サツマ

イモは、豊作でした。

次は、お米を育てた事。田植えは二回目でしたが、田んぼに入ると、ぐちゃぐちゃしていやな感触がしました。実際に田植えをすると、曲がったり苗を多く植えすぎたりしてしまいました。それに、稲刈りでは、今年は雨風が多くて稲がたおれていたもので、行くまでは簡単だと思っていたのが、大ちがいだと分かりました。でも、稲をおこしながら、みんなで力を合わせて、稲刈りをしました。

このように、農業は大変なこともありましたが、十一月の収穫祭で、ぼく達の作ったご飯や汁などを、おいしいと言って食べるみんなの声を聞くと、がんばって良かったと思います。それから、五年生の時と比べて成長したことがあります。以前のぼくは、ドジョウなどがあると追いかけて遊んでいましたが、今年は逆に遊んでいる人がいたら注意するようになったことです。去年の米の収穫量を今年は上回れることはできませんでしたが、一生けん命に働いたと思います。

ぼくは、今年の農業の活動を通して、農業の大変さと喜びを知ることができました。これからは、家の農業の手伝いもしたいです。

喜多方市小学校農業科作文コンクールに寄せて

北海道教育大学教育学部札幌校 総合学習開発専攻
生活・食育グループ 三年目 荻野目 哲

今回、喜多方市農業作文コンクールの編集に携わらせて頂くにあたって、本年度の作品に加えて、ここ数年間の作品を読ませていただきました。これらを読んで感じたのは、ひとりひとりの成長や、学年・クラスを通じた成長だけではありませんでした。市として、農業科の取り組みがより充実していく過程や、農業科をただの体験学習に終わらせないという学校の意識を感じました。「作物を育てること」だけにとどまらず、地域の人にもふるまったり、「食べること」を考えさせる授業や講演、育てている作物についての調べ学習などが行われたという事を、作文を通して知ることができました。

今年初めて、小学生の皆さんの作文を生で見させていただきました。用紙いっぱいそれぞれの想いが伝わってくるものでした。ほかの地域の小中学生（もしかしたら大学生も…）には分からないかともいうような農業の用語や道具の名前であったり、作物の生長していく様子が細かく、正確に書かれていました。これは、先生方や支援員さんの話をしつ

かり聞き、日々育っていく作物の様子をしつかり観察していたからではないかと思います。

それ以上に感心したのは、支援員さんや「食べること」に対して感謝の気持ちが込められている作品が多かったことです。作物を収穫するまでは、土を耕し、種や苗を植え、除草したり…と、たくさんの作業があります。そしてその多くが「一度やれば終わり」という作業ではありません。除草や水あげ（水くれ）は授業中だけではなく、放課後、夏休みと長い期間を通して行っていく必要があります。そういった苦勞を、身をもって体験したからこそ、一緒に手伝ってくださった支援員の方や先生方への感謝の言葉が出てくるのではないのでしょうか。そして、自分たちが苦勞して作った作物をおいしくいただく、生物の命に感謝していただくということにもつながってくるのではないかと感じました。

どうして、このように感じたのかといいますと、自分自身、北海道教育大学で農業を三年間経験しているからです。授業で使用する農場や大学玄関の花壇の管理をしながら、これまで色々な作物を育ててきました。スイカ・人参・大根・ダイズ・ワタなど、うまく収穫できたものから、長雨にさらされて腐ってしまったものまでありました。大きく実ったス

イカが「消えた」こともありました。みのりが得られる事も、もちろん大切なかもしれませんが、それ以上に得られたものは大きかったのではないかと思います。

私は道産子（生まれが北海道）ではないので、冬の雪囲いや、短い栽培期間で行う農業については知りませんでした。早い時には十一月には雪が降り出すため、十月までには一通りの作業を終え、長い冬にそなえる必要があります。また、雪がとけるのは五月頃なので、本州よりも短い期間で作物を育てていく必要があります。さらに、夏でも涼しい北海道の気候は、暑さが必要とする作物を育てようと思った時には、マイナスに働いてしまいます。こうした問題を自分で考えながら解決していくということは、大学の授業だけでは得られないものです。

現在、農業の経験をしながら感じることは、「小さい頃の経験は大人になっても覚えている」ということです。みなさんの多くが、土に触ることができると思います。農場の土を良くしてくれるミミズなどの虫を見ても悲鳴を上げないかと思えます。私も、小さい頃に実家の畑で、キャベツについた青虫を取ったり、小豆の収穫の手伝いをしたり、稲を手植えたものです。小学校では皆さんと同じように、畑でさつまいもや野

菜を育てて、収穫感謝祭で保護者の方と一緒に焼きイモと豚汁を作って食べました。十年以上たった今でも、当時の記憶は残っているし、三年前に大学の農場の手入れを始めた時には、何よりもまず体が覚えていました。

将来、農業に関係する職業につく人もいれば、家の畑や庭で野菜を育てたいと思う人もいるかもしれませんが。食べ物を食べる側に立った場合にも、「どのように作られているか」「作った人はどんな思いで作ったのだろうか」を知っているのと知らないのでは考え方が変わってくるのではないかと思います。

農業体験はすべての地域、小学校でできる経験ではありません。「喜多方で農業科を経験できてよかった」と思えるように、一生懸命取り組んでもらいたいと思います。私自身も、教員となって、農業の経験を多くの人に伝え、一緒に経験できるようになりたいと感じました。

平成 25 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長	高橋 吉博
喜多方市PTA連絡協議会長(慶徳小学校 PTA 会長)	佐藤 儀幸
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所経営支援課長	宗像 宏行
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主査	宗方 宏之
会津いいで農業協同組合営農部長	鈴木 幸男
喜多方市小学校農業科支援員	山田 義人
NPO 法人喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンター理事長・喜多方市農業委員会委員	伊藤 幸太郎
喜多方市産業部農林課長	佐藤 健志
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	小杉 一浩

【特別審査員】

宮城学院女子大学学芸学部教授	佐藤 幸也
北海道教育大学教育学部教授	佐々木 貴子
喜多方市教育員会教育長	芳賀 忠夫

※この作品集は宮城学院女子大学佐藤教授・北海道教育大学教育学部札幌校 総合学習開発専攻 生活・食育グループの全面的なご協力により編集・発行することができました。心から感謝を申し上げます。

編集後記

「これが小学生の書いた作文か！すごい、すごすぎる。自分の子ども達がこんな作文を書いたら私は泣いてしまうだろう。」という感想を持ちました。この農業科を経験したことで、将来農業への従事を夢見る子、友達との関わりで協力することの大切さを学ぶ子、農業科支援員さんや祖父母をはじめとした家族に対する感謝の気持ちを表す子、命の大切さを学ぶ子など様々な視点でこれらの作文は、書かれています。読んで一番感じるの、喜多方市小学生の感性の豊かさです。こんな考えの小学生が喜多方にいたのかと感動せずにはいられません。(私は市教委1年生のため。)

これらは今後この厳しい世の中を生きていく上で、「生きる力」の習得に結びつくものだと強く感じます。これから一緒に農業科で、「生きる力」を育てて行きましょう。(指導主事 小杉 一浩)

「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。」「日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。」「生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。」「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。」「郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。」「これは、学習指導要領の道德教育 5・6 学年の指導内容です。豊かな人間性を育むことは容易いことではありません。どうすれば良いか、中村桂子先生が出したひとつの答え「小学校で農業を必修に」、その実践を踏まえた、この作品集は、子どもたちの心が豊かに育まれている証なのです。小学校農業科に携わる学校の先生や地域の方々、みんなの誇りです。(担当主査 渡部 通)

「ぼくのバラの花も、他人が見たら同じに見えるでしょう、でも違うんだ。だって、ぼくが水をあげた花なんだから」星の王子さまはいいました。農業科を学んだ子どもたちも同じ気持ちだったでしょう。「大事なものは、目にみえない」優しさ。幸せ。友情。想い。絆。そして命。見えないものは心で捉える。大人になると考えることは得意でも、感じることは下手になる。作文の中で子どもたちは、自らの心の動き、変化についてとても敏感で、よく察知し表現出来ていました。「心が揺れる」というとなんだか、動揺しているとか、ひ弱な感じがするかもしれません。でも、何かを思っ「心が揺れない」ことのほうが、不幸なことなんだと、子どもたちから教えられた気がします。(担当職員 只浦妙子)

平成 25 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成 26 年 2 月 発行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会

